

新書紹介

都市デモクラシー

内田 満著

中央公論社 新書版 一九九頁 三六〇円

はじめから本屋の宣伝風に書くのは一寸気がひけるけれども、本書のキャッチフレーズを考えるとすれほどなるだろう。「地方の時代」下の統一地方選挙を闘う選挙参謀必読の書」あるいは本誌の読者向けには、「係長試験受験者が欠かすことのできない教養書の一つ」とでもいったところであろうか。

それはさておき、まず本書の紹介に入ろう。

「I都市化の中のデモクラシー」農村デモクラシーから都市デモクラシーへの一大転換の局面を、①都市への人口集中、②人口の著しい流動化現象において検討し、アメリカや日本の

都市の実情が分析される。

「II現代遊牧民の投票参加」では、このような都市化の政治への影響の一つとして、投票参加がとりあげられる。せっかく選挙権をえた大衆が都市化現象の進展につれて遊牧民化し、棄権率を高めつつあること。そしてさらに重要なことは、代表民主制のあり方にも大きな影響を加えつつあることが指摘されている。

「III脱政党化時代の政党」では、政党のもつ基本的機能として①集約機能②選挙機能③統治機能の三つがあげられ、都市化によって政党が大きな打撃を受けた①と②の機能、つまり「世論と政府の連結器」の役割を減

退させたことが立証される。アメリカにおける政党マシンの衰弱、日本における「三バン」のうち、伝統的地盤がゆらいでいることである。さらに「支持政党なし」層の増大、都市議員のあり方の問題、選挙産業の発達が述べられたあと、今日の政党の機能障害の症状にもかかわらず、政党の役割の重要性を訴えて終る。

「IV圧力団体と市民団体」

工業化を背景とした都市化の反映として発生した経済的利益団体としての圧力団体や、脱工業化と関連した都市化が生み出した環境保護団体や消費者団体等の市民団体とデモクラシーとの関係、その功罪が論じられる。

「V地方自治と住民パワー」

地方自治はよく「デモクラシーの学校」といわれるが、それは政治体の小規模性という条件に対応してはじめていえたことである。しかし今日の大規模化した都市でも果してこれは可能だろうか。大規模化した直接的要因は、行政の能率化と財政基盤の強化にあった。「大きいことはいいことだ」という行政の

論理であり、市民の側の参加の視点からみると、むしろ悪影響の方が大きい。市政府の巨大化と活動の積極化・拡大化に比例して、市政府の適正な活動範囲が活力ある自治との関係や市長と市職員との関係、さらに遊牧民と自治との関係等で問い直されることになる。

最後にアメリカでつい最近起った二つの事件——バックキー事件とカリフォルニア州の「税金反乱」事件——は現代の都市社会の中でデモクラシーのあり方をめぐる「近代」への間直しが始まっていることを象徴する事件だとして、都市デモクラシーを新しい構想の下に展望する必要性を説いて結んでいる。

以上が本書の要約である。アメリカ政治学の動向という理論的研究と本市の都市科学研究室の市民意識調査や著者自ら参加したアンケート調査の結果等を引用した実証的研究が、バランスよく調和し、最近の政治状況をみる私たちの眼を鍛えてくれるコンパクトな好著であろう。しかし、少しもの足りないなと私には思われる点を若干記す

う。一つは、都市化現象を人口の集中化と流動化という二つの視点にだけしぼりきれぬものかどうかという点にある。また、同じ都市といっても、巨大な都市圏の広がりの中で本市のよる大都市と地方の中小都市とはかなり事情が異なってくるのではないか。さらには、都市化現象の背後にあるものは何かという問題も残ろう。

著者によれば、農村デモクラシーと類を異にする都市デモクラシーの展望をひらく作業は、まだ始まったばかりである。私たち一人一人に課せられた課題であるともいえるだろう。

〈総務局主査 横山 悠〉